

幼き日の 娘の眼から…

榎本恵吾

<1993(平成5)年6月号『白鳩』誌38~40ページより>

私には四人の娘がいる。三女が二十二歳、大学の卒業を前に、「生長の家宇治別格本山の一般練成会(十日間)を受けた」と、自ら希望して今年二月に参加した。練成会というのは、合宿して生長の家の教えを学び、実践する集まりだが、私はその別格本山の講師として長いこと勤務している。

十日間をまじめに終えて帰宅した三女は、私たち夫婦に「今の時期に受けさせてもらって本当によかった。ありがとうございました」と感謝をのべ、その晩は深夜に及ぶまで興奮気味に喜びや感動を、時には涙を浮かべながら家族に報告していた。

実は我が家では、私も妻も満十九歳ではじめて練成会というものを受けていたことで、とりたてて何ということもないその符合を喜んで話題にしたこともあったためか、長女も次女も自発的に希望して十九歳で、十日間の練成会を受講した。そして、大きくものの観方や考え方が変わって、その後の人生が開けたのであった。

三女が十九歳になり、姉たち二人からは「練成会を受ける？」と時々聞かれていたようであるが、私も妻も、本人の自由意志に任せて、ずっと過ぎてきていた。「スタートのときは、やはり神意に任せよう」そう信じて祈っていたのである。

大学四年、卒論も提出し、時間に余裕を感じるや否や、三女は自分から「二月の練成会受けてもいい？」と申し出た。私も社会へ巣立つ直前は、人生の方向を決める最善のチャンスだと思っ、大喜びで賛成した。十九歳で受けるもよし、

二十二歳で受けるのも、またよかつたのである。

十日間を終えて、前にもまして生き生きと自信と明るさに安らいでいる三女を見ていて、この子の幼なかつた日のことが想い出されてきた。四、五歳の頃のことだつたらうか……。

「日本昔話」というテレビアニメを見ていた時のことである。

お話は、「昔々、心のきれいな、やさしいおじいさんとおばあさんがあり、隣にはそうでないおじいさんおばあさんが住んでいました」というおきまりの昔話であつた。そして、結末はやさしいおじいさんおばあさんは幸せになり、隣のおじいさんおばあさんは、さんざんな目にあつてしまつたという、これまたおきまりの終わり方であつたのである。このお話を見終つたとき、この娘が言つた。

「心のやさしいおじいさんおばあさんは幸せになつていいけど、どうして神様はお隣のおじいさんおばあさんもやさしい、きれいな心に生んであげなかつたの？ お隣のおじいさんおばあさんがかわいそうじゃない?!」。その眼には涙さえ浮かべて怒つたように言つたのであつた。

また、同じ頃だつたと思ひ出すのであるが、上の二人の姉たちが、何かを「とつた」とか「とらない」とかいつて、姉妹喧嘩をしていた時、母親が「イエスさまという偉い方は、『上着をとるものには下着をも上げなさい』といわれたのよ」と言っているのをそばで聞いていた三女が、「その人は今でもはだかのまんまかなー、寒いだろうねー、かわいそうー」と、本当に気の毒そうに言つたので、みんなで大笑いしたこともあつた。

何か三女が練成を受けてくれたのを、私が心からよこんでいるせいだろうか。この子のこんなことが想い出されてきたのである。

“どうして隣のおじいさん、おばあさんも神さまはやさしい、きれいな心に生まなかつたの？”

というテーマは、生長の家の創始者である谷口雅春先生の悩まれたことであつたのではないかと私は思い、最近そのことについて練成会の講話でよく話すようになっていく。なるほど、人は日頃の心がけが大切であり、仏教でも「三界は唯心の所現である」(現象の世界は、ただ心の現われた世界である)と教えているのである。

しかし、その心がどうにも自分の思うようにゆかないので困り果てておられたのが、若き日の谷口雅春先生であつたのではなかつたか？ と思えるのである。心がけが大切であり、心を明るく調和にみちたものに保つということはすばらしいことである。しかし、なぜその心を平等に神はつくられなかつたのか？ 比較的よい心を保てたものを天国にゆかせ、その反対の心のものは地獄へ……というのでは、創造主である神に責任はないのか？ という先生の疑問は、神への不信に繋がつてゆかれたのではなかつただろうか？

“神様も淋しからずや、天国と地獄を創造り、火の雨降らし”と谷口雅春先生は、大正時代に大本教で修行していた頃、歌つておられるのである。そして、

へこのごろわたしはもう何が善か何が悪かわからないのです。

私を救う者は、私自身の力でないことがわかりました。わたしは善ならんと欲しても善になることができない業の催しに引きずられていることがわかります。私自身が努力し、改心してわたしを救わねばならぬのでしたら、わたしはどうして救われることはできません。『改心いたされよ。改心いたされば地震、雷、火の雨を降らして平げる』では、わたしは平げられるほかありません。改心しないそのまま救って下さる神がわたしは欲しいのです。『生命の真相』頭注版第19巻、自傳篇182ページ、日本教文社刊)

と悲痛な言葉が発せられているのである。

しかし、谷口雅春先生は「不完全、不平等なる心というものは、本来無い。完全・平等なる実相のみがある」という啓示によって、この問題を超越してゆかれるのであるが、「本来心はない」ということは、「改心しないそのまま救われた」という願いの前に聞かれた、大いなる光の世界であったのである。心のきれいなおじいさん夫婦も、その反対の心のおじいさん夫婦も、神の前では平等に完全に生かされているのが、「本来にある」世界であるということだろう。

練成会では、「笑いの練習」という行事が行われるが、その人の過去を調べて、その結果、「神の前でこの人は笑う資格があるが、こちらの人は笑う資格がない」と等と、決してよりに分けたりはしないものである。どの人もどの人も大笑いするのである。この「笑いの練習」というのは、声の大きさの問題の前に、「全人類は、今、そのまま神の前で胸を張って、晴れ渡ってよろこんでいい資格があるのですよ」という、

神の前での完全平等なる実相（ほんとうのすがた）への祝福であると思うのである。

生長の家の「現象は心の現われ」という教えを知らない人でも、「私の心がけがよくないのでこんなことになって……」と言うのを時々きくことがある。ガンで死にそうになっている人が、「私には恨んでいる人があって、それが心のカタマリのようになっているんです。あんなヤツと知り合いになるということが、そもそも日頃の心がけがよくないからなんです」とご自分でちゃんと分析までしておられるのである。

その恨みの心もとなのだったら、許して柔らかな心になつたらよいということも分かっているのである。しかし実際は、「あいつを許すくらいなら死んだ方がましだ」という人が多いようなのだ。

生長の家に来て、恨みを許すことができたとき、気がついてみると症状が消えていた、という体験を生長の家の信徒の中にたくさん聞くことができるが、それは、自分の私の心を超えた、神に生かされているという事実があって、そこには本来の恨んだことなど一度もない「本当の自分」があったのが、「本来のすがたをあらわした」ということではないだろうか……。

私はあの日の幼かった三女の涙をためた、怒ったような眼を今も時々想い出すことがある。あの時は、私はどのような彼女に話したか忘れてしまったが、そこにこそ、娘に話すべき最も大切なことがあった、ということであらためて想っている今日このごろである。